

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名 小池 勝也

本論文は、南北朝・室町時代の鎌倉・京都の顕密寺社の組織やその変遷を分析して、それぞれの仏教界の様相を明らかにし、さらに両仏教界の関係について考察したものである。鎌倉幕府の影響もあり、鎌倉時代の両仏教界は密接な関係にあったが、南北朝・室町時代に武家政権が京都（室町幕府）と鎌倉（鎌倉府）に並立するようになると、両仏教界はそれぞれどのような特質を帯びるようになり、また両者の関係はどのように変化したかという点が本論文の基本的な問題関心である。

第一部「鎌倉顕密寺社と武家政権」では、鎌倉を代表する顕密寺社である鶴岡八幡宮寺と勝長寿院を取り上げ、それぞれの別当や供僧組織の変遷と武家政権の関係を論じる。勝長寿院の別当は、将軍の子弟や鎌倉公方（鎌倉府の首長）の兄弟が任じられ、その貴種性を高めていくが、別当本人はもっぱら在京するようになり、鎌倉顕密仏教界における存在感は低下したとする。一方、鶴岡八幡宮寺の別当はいずれも鎌倉在住僧が任じられ、また供僧も別当と同じ東密派の僧によって占められるようになり、鶴岡八幡宮寺別当は鎌倉顕密仏教界で大きな役割を果たすようになったとする。

第二部「醍醐寺諸院家の展開」では、京都の顕密仏教界の中心である醍醐寺の様相を検討する。醍醐寺では室町幕府の信任のもと、三宝院院主が醍醐寺座主を歴任していくことになるが、南北朝時代後半の三宝院の地位はけっして盤石なものではなかったとする。すなわち、14世紀末に三宝院光助に代わって理性院宗助が座主に任じられたことに注目し、その背景を論じ、また三宝院ないし三宝院流内部でも院主の地位をめぐる対立があったことを明らかにする。

第三部「東西顕密仏教界の関係性」では、鎌倉時代には法流・人事面で密接な関係にあった鎌倉・京都の顕密仏教界が、南北朝・室町時代にはそれぞれ自己完結性を高めた結果、京都の顕密寺社にとって東国寺社は経済的利権としての側面を強めたとする。また東国寺社の諸職をめぐる争いも、京都における醍醐寺諸院家間の対立に端を発するものであったことを明らかにする。

当該期の鎌倉顕密寺社に関わる史料は乏しいにもかかわらず、別当に注目するなどの工夫を施すことによって、その特質を浮かび上がらせたことは本論文の成果と言えよう。また京都の顕密寺社についても、醍醐寺内の複雑な対立を明らかにし、従来対立的ないし没交渉的側面が指摘されていた鎌倉・京都の顕密仏教界の関係について、京都の顕密仏教界内部の問題から説明を試みた点は研究史を更新するものとしても注目される。顕密寺社を分析する素材としての聖教史料の活用や、「寺社」「顕密」の定義、禅・律や神社と武家政権との関係などに課題を残すが、本論文の価値を損なうものではない。

以上により、本審査委員会は、本論文を博士（文学）の学位を授与するにふさわしい業績と判断した。